

近世看板、暖簾と都市景観の形成に関する研究

杉江裕子

商家にとって看板や暖簾は、商品を宣伝したり、店の目印となるものである。本稿ではまず、看板、暖簾の発達過程を探り、どのような種類のものであったのかを検討する。その上で、それらが、近世の都市景観形成の中でどのように位置付けられ、関わっていたのかを京都の町から考えてみたい。その方法としては、主に絵画史料を用いて考察してみたいと思う。

看板は八世紀初頭の藤原京の時代に、その原形ともいえるものが存在していたことが『令義解』から推測することができる。しかし、このときの看板は自発的な看板ではなく、又ほとんどの人が文盲であったために、店の目印になったとは考えられず、宣伝という意味も含まれてはいなかった。看板を店の目印、広告として利用することを考えると、商業の発展した室町期にその起源があるといえよう。その後、近世に至っては看板も多種多様なものとなり、大店などでは大型で派手なものを作るようになり、しばしば奢侈禁止令の対象ともなった。

暖簾は商家、民家を問わず「とばり」等の名称で、遮蔽具、屏障具として利用されていた。その後、室町頃から商家の暖簾は目印として家紋や屋号を入れるようになり、商業が発展するにしたがつて、看板と共に広告媒体として定着していったのである。

これまでの研究史で、暖簾について体系的に述べた著書には、谷峯蔵氏の「暖簾考」や、大伏肇氏の「図説広告千

年史」があげられる。

看板についての著書は多く、近世にはすでに、柳亭種彦編の「還魂紙料」「用捨箱」、山東京伝編「骨董集」、喜多村筠庭編「筠庭雜考」、喜多川守貞編「守貞謾稿」等の考証隨筆が刊行されている。また、明和六年（一七六九）には最古の絵看板集、北尾辰信による「絵本富貴種」が出されている。明治に入ってから岡本混石編の「古今百風吾妻餘波」が「東都看板譜」と題して江戸末期と明治の看板を紹介し、次いで、坪井正五郎著「工商技芸看板考」が刊行され、専門書として体系づけた。

その後も、松宮三郎著「江戸の看板」、天理大学付属天理参考館編「看板とちらし」、林美一著「江戸看板図譜」、谷峯藏著「日本屋外広告史」等と多くの専門書が刊行されている。

こうした著書は、看板、暖簾を単独で知るには十分であるが、それらを都市景観のひとつとして捉えた時に、どのように位置付けられていたのか考えられたことはなかった。奢侈禁止令が出されたり、屋根看板や建看板の設置を許可制にしていたことは、単に華美になることを禁じたばかりでなく、都市形成や町並み景観に対しての配慮からとも考えられる。

第一章では、暖簾の変遷について述べる。もともと暖簾は屏障具として使われており、平安初期の承平年間に書かれた「倭名類聚抄」屏障具の項に、帷、幌といった暖簾と思われる言葉がある。これらは、住居の出入口や窓、室内に掛けて仕切りや目隠し、日除け、ちり除け、風除けなどの目的で利用していたと思われる。

暖簾という言葉は中国から伝来したもので、それが伝わった時に、用途を同じくしていた帷や幌といった言葉が暖簾と変化したのであろう。

暖簾に使用される色もさまざまで、職業によっては決まっている場合があるので、主なものを色ごとに分類する。また、掛ける場所や長さによって、名称が違うので、特徴をあげながら分類していく。

第二章では看板の変遷を見る。看板は、その形だけの起源は八世紀初頭にまでさかのぼることができるが、看板に広告や宣伝をするためのものという意味が含まれた時をその起源とするならば、その起源は、文明十九年（一四八七）の『星光寺縁起絵巻』にある。

また、看板も設置する場所によって名称の違いがあるので分類する。

第三章では、看板、暖簾と都市景観形成との関わりを検討する。洛中洛外図屏風には多くの看板や暖簾が描き込まれ、町並みの様子もわかる。しかしこれは、絵画的表現のために省略したりして、当時の町並みを正確に示しているものではないのであるが、おおよその町の姿は確認できる。そこで、同業者の店舗を例に挙げて、暖簾と看板それぞれの变化や、それらに対する意識の移り変わりを考察する。

次に行燈看板をとりあげる。行燈を看板として利用することにより、夜に営業する夜見世が賑わうようになり、町の様子は一変する。それを示す史料に『都林泉名勝図会』がある。その中に、四条河原の夕涼みの図がある。ここでは、店の軒に掛看板をかけ、川べりに出した川床には、各店ごとに箱型の行燈看板を出して、店名が分かるようにしている。京都ではないが、『横津名所図会』の中でも夜見世の賑わいが描いてあり、名所となっていたことがわかる。これらの光景は、行燈看板があることを前提とした上で成り立つものであり、行燈看板が夜の町並みを産み出し、形成していったと言え、都市景観形成に大きく貢献することとなった。